

第6回 道路の将来交通需要推計に関する検討会 議事要旨

平成20年10月21日(火) 10:00~12:00

国土交通省(中央合同庁舎3号館) 10階共用会議室A

<出席委員(敬称略、五十音順)>

石田委員長、岡本委員、鈴木委員、豊田委員、根本委員、兵藤委員

<議事要旨>

1. 将来シナリオについて

- ・人口やGDPが一本ではなく上下幅をもって推計されているように、我々の推計でも幅を持たせる議論をしていく必要がある。
- ・将来の失業率は性年齢階層別に扱える国勢調査をベースとし、過去の平均値を用いて推計することとしてはどうか。
- ・免許取得可能な初期の年齢階層からコーホートをスタートしていく方法もあるのではないかな。
- ・90歳以上の免許保有率は現状維持程度で想定する方法もあるのではないかな。

2. 旅客モデルについて

- ・21世紀ビジョンの中で可処分時間の増加の想定があるので、地域内、地域間とも観光目的の発生原単位の将来の増加を考える方法もあるのではないかな。
- ・移動コストについて、燃料価格は国民の大きな関心事であり、短期的には需要に相当影響を及ぼしていると考えられる。これを今回のモデルに取り入れることは難しいが、何らかの配慮をすべきではないかな。

3. 貨物モデルについて

- ・生産額と輸入額について、機械が大きく増加しているが、外国から部品を輸入して組み立てて輸出する場合には国内の輸送には影響しないことを考慮すべきである。
- ・車種業態別分担率に関して、営業用普通貨物車の分担率が右肩上がりで見られているが、どこかで上限をむかえるものであることを考慮すべきである。
- ・貨物車の大型化に関して、十数年前に貨物車の規格が変わり構造変化が起きている。このデータのトレンドを使用する範囲についてはこのような状況を考慮すべきである。
- ・平均積載トン数モデル等をトリップ長100kmで区分することに関しては、十分なレベルに達していると思われる。
- ・品目の詳細化に関しては、それぞれの動きを説明できるような区分になっていると思われるので、現行のものでよいと考えられる。

4. モデルの具体化について

- ・安定した将来値を推計することが主たる目的であるため、細かい品目の現況値にモデルを合わせることを必ずしも最善ではなく、モデル間、品目間等の整合が図られたモデルを選択するという重要性もある。
- ・本日の指摘事項を踏まえて具体的なモデルの構築作業を行うこととする。
- ・モデルの具体化に当たっては、各委員に個別に相談を行いながら検討を進めてほしい。
- ・将来交通量予測のあり方に関する検討委員会で指摘された事項への対応状況は別途整理する。

5. 将来 OD 表作成について

- ・マクロチェックに関して、総走行台キロだけではなくトリップ長分布のチェックも検討していただきたい。

6. モニタリング等について

- ・道路空間のパフォーマンスを捉える、交通の質の変化を迅速かつフレキシブルに捉える、といった観点からもモニタリングが必要である。
- ・今回の検討に当たって、調査体系やデータ制約があったことについて、国への問題提起をしておきたい。
- ・今回のモデルは、BAU、すなわち今の状況が変化しないという考え方に基づくものであり、政策立案のための1つのベースケースになるという性格のものであることを認識することが重要である。その上でモニタリングの結果を踏まえ、適切なタイミングで推計を見直していくことが必要である。
- ・全国の走行台キロという一つの数値のみに着目するのではなく、推計した走行台キロの中に多様なマーケットがある、といった観点を念頭に置いて、モニタリングのシステムや結果の打ち出し方を検討すべきである。
- ・燃料費だけではなく、税制や高速道路の料金設定といった政策が、交通需要にどのような影響を与えるのか今後議論すべきである。
- ・観光の点から見ると、センサスは秋季のみの調査であり、この時期が閑散期となる観光地ではその特性が捉えられない問題があるので、年間の中での補完というものを検討すべきである。
- ・全体の作業プロセスの迅速化を考えるべきである。
- ・今後パブリックコメントを行うこととし、その原案作成については、委員長と事務局にて進めさせていただきたい。